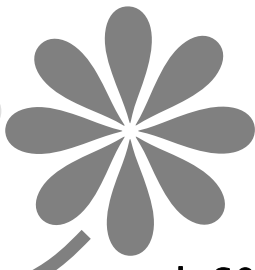


たんぽぽ



vol. 60

平成19年10月発行

発行者 放送大学

富山学習センター

責任者 所長 渡邊 裕司

学びの道？

客員教授 奥田 実

久しぶりに、山を歩いた。人はよく学びを山登りにたとえる。学習とは、頂上をめざすものだと。学ぶ人にとって頂上とはどこなのだろうか。

私が影響を受けた大学時代の先生方の一人に河合隼雄先生がいる。残念ながら、今年の7月20日に世を去られた。先生の経歴を今さら披露するまでもないだろうが、一言でまとめるなら、日本の臨床心理学の理論と組織を体系化したカウンセラーの元祖で、最後は文化庁長官を務められたということになる。

私の専門は教育社会学で研究室は異なり、直接の接点はなかったが、河合先生は卒論諮問の教官の一人であった。稚拙な卒論で、他の教官方からは厳しい批評をいただいたが、河合先生一人だけが、問題意識と視点が面白いと擁護して下さった。その後何度か学生仲間と共に先生を囲み、お酒を飲み語り合う機会があった。とても学生思いで、温かい先生という印象がますます深まった。

大学院に入り、研究室では毎週開かれるゼミにおいて、院生及び卒研究生が自分の研究について報告することになっていた。さまざまな質問や批判が飛び交う中、必ず出る質問は、「あなたの問題意識は何ですか」ということだった。研究において、大事なものは、その内容や結論は言うまでもないが、それ以前に「研究動機や視点」であるということ学んだ。

学習は目の前の山に興味を抱いて登り始めるが、研究はその過程で何のために登るのかを問い直すきっかけとなると思う。ただしその問いは、どの頂上をめざすかというものではなく、その道を歩く意味を問うもののように思える。

メキシコの先住民の呪術師ドン・ファンは、文化人類学者カスタネダに尋ねる。「道は何のためにあるのか？」と。カスタネダは答える。「どこかに行くために」と。

ドン・ファンは言う。「そうではない。道は歩くためにあるのだ」。

何事においても、目的も重要だが、それよりも過程が大事であることを考えさせられる。学習や研究もそうだということを、河合先生の訃報を聞き思い起こされた。